

永遠の旅路 vol.Ⅱ

『先輩と後輩』

風都葉月



◇

◇

とばりの降りた静寂な世界。

手造りコートの際に首を埋めながら、人気の消えた公園内に視線を送る。

パンダのスプリング遊具や、円形の回転ジャングルジムが音を立てずに月明かりに晒されていた。

「……………」

ちゃんと、俺はここに来れたんだな。

ちょっとした満足感と、何とも言えない空虚感が胸に混在している。

それでも今この場所に立てている自分が、素直に嬉しかった。

水銀灯の冷たい明かりに照らされたベンチに足を向ける。

ソコにしっかりと書かれた2つの名前。

俺は、来ることのない人を待っていた。

『——時刻は夜の12時、ちょうどでいいですよ？——』

「……いいわけないって、言ったんだけどな」

マジックでベンチに書かれた彼女の名前を撫でると、自然と頬が弛む。

季節は春でも、深夜になればまだまだ寒いんだと、あの時ちゃんと忠告したのに。

押しに弱かった昔の自分を恨むしかない。

「……………」

名前に添えている手から腕時計に目を移すと、時刻は11時45分。

そのまま、公園ないに自分以外の人がいるか探してみた。

「……………」

はあ、と一度だけ深い溜息を吐いて夜空を見上げる。

判っていたのだから、落ち込む必要なんてないのだろう。

むしろ、ほころう。

ちゃんとこの場所に立てた自分を。

そして感謝しよう。

今こうしてここにいられるのも、ひとえに彼女のおかげなのだ。

俺は目を瞑って春の夜風に身をゆだねると、2年前の追憶にふけた。

◇ ◇

あの頃の自分は、いわゆる普通の浪人生だった。

現役受験に失敗したわけだが、けれどそれは自分で選んだ道でもある。

おつむの低さを自分で語るのもなんだが、この世に生まれ落ちて十八年、俺は完璧だと思えるほどに勉強をした、なんて記憶はついで持った覚えがない。

テスト勉強は全部一夜漬け。それさえ満足に出来なかった時もある。

けれど一夜漬けをした時は、それなりに睡眠時間を削って勉強した。

けどしょせん一夜漬けは一夜漬け。

テストが帰ってきた後にいつも、「あと三日前から、いいやもう一日あれば」なんて思ったりした。

そういう生き物なんだ、俺という男は。

すなわち凡人。

けどそれなのに、根拠のない自信だけは持っていた。

問題ないさ、やる気になれば出来るんだから、と。

そう、だからだ。

高校三年生になって受験シーズンの真っ只中、その頃になってようやく勉強が面白くなってきた俺は、ああ、俺ってバカだし、今年はどう足掻いても大したところにはいけないから、だったら浪人しよう、なんて思い立ったのだ。

大丈夫、この世の中、向上心ゆえの一浪なら問題はない。

結果を出せば充分プラスにだってなる。

それに、ほんと、生まれてこのかた十八年。

浪人する一年間を加えて十九年間生きたことになるわけで、そのうちのたった一年ぐらい、本気になった自分がどれほどのものか、試してみるのもいいんじゃないか、なんて、思ってそれがなんだかカッコよく思えたのだ。

それに学生でもプーでもニートでも社会人でもない、けれど社会的に認められた特別な期間、『浪人生』というものに多少の興味もあった。

というわけで、現役時代に受けた大学は一つだけ。

偏差値はそこまで高くないが、倍率は鬼。

ちなみに高くないといってもそれは一般の基準で、一般以下の自分にとっては目一杯手を伸ばしても届かないほどの距離があり、その上で倍率が鬼なので、試験を受ける前から俺の気分はすでに記念受験だ。

まあそんなこと、親には言えないが。

試験を受けるのにだって費用がかかる。

それを記念受験と言っている自分は、かなりの親不孝者だ。

そんな自分なわけで、当然落っこちた。

周りがどこどこに受かった、どこどこに落ちた、と会話を交わす中、「まかせろ、俺は地元の予備校に合格だっ！」なんて、親指を立ててバカ丸出しなことを言っていた。

さあて、一年間やってみますか、どこまで上がれるか俺っ！

と、ヤル気も気力もバリバリ。

浪人生に娯楽はいらぬ、と部屋のマンガ本を全て押し入れにしまい込んで封印。

ゲームもテレビも全部封印。

友人には「すまんが、この先一年間は音信不通となる！ 遊びの類は誘ってくれるな。しかし縁だけは切らないでくれっ！」と強くお願いしておいた。

そしてみんな、快く了解してくれた。

「じゃあ気分転換したくなったらお前から連絡しろよな」なんて言ってくれた。

けれどしかし、これらは少しやり過ぎで、少々無理があった。

数ヶ月経った頃には三分の一ぐらいゲームも漫画も封印が解かれていたし、ダメと分かっている気づけば娯楽に身を落としていたりもした。

つまり俺の本気は、そこら辺で限界だったらしい。

本気になった俺弱しっ！ なんて思っては首を振り、いいやまだだ、とまた奮い立つ。

そんな感情の起伏が激しい日々が続く。

そもそも、極少数の本当に出来る奴らは浪人なんてしないのだ。

いいや、本当に出来る奴だからこそ浪人するのもかもしれない。

周りを見れば、浪人生にだっていくつかのタイプがある。

勉強仲間を作って黙々と勉強にはげむエリートっぽい生徒たち。

俺みたいに、授業にはぎりぎりついていっているが、それ以上のことを完璧にこなすことは出来ない者たち。

そして、予備校で仲良しグループを作って時々講義をサボって遊びに行ってしまう者たち。

同じ浪人生の一年間にしても、勉強の密度はその人の気持ち一つで雲泥の差が生まれる。

息抜きだって絶対に必要だから遊んじゃいけないとは思わないが、そして俺はどちらかと言えば泥のほうに近いケースだが、それでも必死に食らいつこうとしていた。

けれど、そんな生活はとても息が詰まる。

いつの間にかモチベーションが下がって、授業の進み具合に遅れだし、そのことに焦ってより乗れなくなる。

完全なる悪循環に入ってしまう、俺は一度予備校から離れて自宅で独学することにした。

なんとなく、ヒキコモリってこういうのかな、なんて思う。

別に外に出られないわけじゃないけれど、大して用がないから外に出ない。

気分転換はしたいし、実際には遊んでもいるんだけど、表立って遊ぶのはいけない気がするから、友達を誘って遊びに行くこともしない。

なんだか、腐ってるな、と思った。

なにが悪かったのだろう？

頑張っている自分に憧れた。

墮落している自分が嫌だった。

なんでもいいから、今を変えたい。

恋愛でもすれば、こんな自分でも変わるのだろうか？ そんなことを考えて、ああいや、また最悪な自分が出るだけだな、と否定する。

なんだか、自分で自分が変わったなと思う。

根本的なところは変わっていないにせよ、今と浪人初期では全く勢いが違う。

こんな風に自分のことをかえりみると、もっとずっと前、自然と、頑張っていた中学時代や高校時代にまで想いが遡っていく。

あまり過去を振り返るのは好きじゃないが、それでもあの頃はこうじゃなかった。

仲間たちと一緒にスポーツに明け暮れ、恋に恋していた時期だってある。

とはいえ恋愛に関しては、高校三年の時に最悪な自分を知って以来、あまり考えないようにしている。

自分には、人を好きになる資格がない。

本気でそう思えるほどに、自分は自分のことが信用出来ない。

だけど、判ってはいるんだ。

こんな後ろ向きで理屈っぽい自分が、そもそもの原因だってことくらい。



「思った以上に……しんどくなってるのな」

自転車を店頭の置き場におくと、陸橋やら丘やらの起伏を乗り越えた両足を擦って店内に向かう。

久しぶりに家を出たわけだが、浪人生な自分は受験の参考書を買いに来たわけではなく、マイブームなアニメのCDを購入しにきたのである。

(ヒキコもりなのはいいとして、浪人生としての自分は確実にデッドラインを超えてるな)

「まっ、今さら嘆いても仕方ないっ」と

今年がダメなら来年があるさ。

らいねん～がダメなら～さらいねん～♪ て、本当に駄目だな、俺。

ふむ、どうせダメならいっそのまま突き進むか、なんて、どうあっても間違ってることを考えながら店内に入っていくのだった。

◇ ◇

「ん～と」

CD売り場の陳列棚に指を滑らせながら目当てのCDを探す。

(お、あったあった♪)

御目当てのCDは、決して親には見せられないようなエロチックな表紙を所持している。

躊躇もせずに手に取ろうとするが、近づいてくる軽めの足音を聞いてすぐに上体を起こした。

うおうっとまずいっ、この足音は女だっ！

「ふ、ふう～ん。世の中にはこういう世界もあるんだなあ」

な～んて言葉を吐いて誤魔化す時は、自分はかなりのヘタレだったんだなあ、と再認識して項垂れたくなる。

(まあいいや、さっさと行っておくれ)

と、女の子に目を向けると、そこで飛び込んできた女の子の姿に一瞬思考が停止した。

「……………」

すぐ隣のレンタルCDコーナーで、テクノ系ミュージックを手にしたまま身動きを取らない少女。

(カッ、カワイイッ！)

凜とした横顔はどこかスポーツ少女的なボーイッシュさと意思の強さを感じるのに、何と言うか、かまいたくなる様な人懐っこい雰囲気も持っている。

なにより空のCDケースを吟味するその目が良い。

釣り目を真剣に細めた結果、吟味している目というよりもどこか羨んで拗ねているような目になっていて、見ていてとても楽しい。

「……………」

CDケースの裏を見ながら考え込む女子高生とおぼしき年頃の女の子。

彼女はおもむろにケースを開けると、中から表紙だけを取り出して、

「持って帰っちゃ駄目かな？(ボソ)」

「いや、そらダメでしょ」

「え？」

キョトンとこっちに顔を向けてきた。

ああっと、しまったつい突っ込んでしまった。

「ああいや、えっと、どうも」

シュタツと右手をあげる。

「……………」

———ああっ!？」

彼女は俺を視認すると、ポカンとした顔から一変して驚愕の顔になった。

(ええっ、なにっ?!)

その驚愕ぶりにたじろいで一步後ずさるが、彼女は驚愕の顔を崩そうとしない。

(ナンダッ? ナニナニッ! なんかしたっけ俺っ?!)

このまま踵を返して逃げ出すべきだろうか？　なんて考えると、彼女はおろおろと明らかに動揺しながら視線を逸らし、その逸らした先にはみごと「不審者に注意！」なんてとんでもない注意書きが貼ってあってちょっと余計なお世話——じゃなくて俺は違うよっ、不審者に見えるかもだけど違うしっ！！　なんて必死になって首を振る。

（待って待って、ほんとお願ひ、ちょっと待って！　不審者に見えても変態じゃないよっ！？　世の中のルール守ってるよっ！　だからそんな張り紙ジッと見ないでって言うかヒキコモリと不審者を一緒にしてはいけないって言うかどういうこった！　ヒキコモリな俺が声を掛けるとそれだけで犯罪行為になっちゃうのかっ！　ああっ！　ああ、ああっ！　そうなのかもお～……）

なぜだか理不尽なそれに理解を示してどば～っと滝のように涙を流したいが、ソレが出来るわけも無く、俺はただ陸に上げられた魚類のごとくパクパクと口を開閉した。

「～っ」

一方、バツと風を切るような勢いで再び俺に顔を向けると、女の子は頬を染めながら勢い良く頭をさげる。

あまりに勢い良く頭を下げたせいで、彼女の長いポニーテールに絡んでいたアクセサリーが髪と一緒に襲い掛かってきた！

ズシュッ！　と、強烈なムチみたいになっちゃってアクセサリーともども俺の両目を強襲。

（なっ、なんだそりゃっ！　不審者撃退用の武器だったのかっ！）

などと驚愕しつつ考えると、そこで、

「おっ、お久しぶりですっ、高弘先輩っ！」

「つおおおお～っ！！」

「せっ、先輩っ？！」

「ぬおああ～っ！！」

両目を襲う激痛にのた打ち回ることしか出来なかった。

◇　　　◇

「で、だ」

未だヒリヒリとひり付く顔と目をそのままにして話を進める。

「あの、先輩……顔が」

おずおずと自分のハンカチを俺の顔に近づけてくる自称後輩。

「なにをするつもりかな？」

顔に近づいてくるハンカチを、俺は右手で制すると同時に遮へいする。

「はいっ。ばい菌が入るといけないから、こうやって擦るんです」

ゴシゴシと空中を擦りだす女の子。

「……気持ちだけ、受け取っておくから」

空気の変動だけでひり付くところを、そんな風に擦られるわけにはいかない。

「先輩？ 何かしましたか？」

「いや、大丈夫。というか、その先輩ってやつなんだが……」

訊くと自称後輩は肩を落としてしょげ返る。

「やっぱり……判るわけ、ないですよね……」

……げっ。

消え入りそうな声で目尻を濡らす彼女を前に、ふいに罪悪感とも焦燥感ともとれる情緒が襲ってきた。

自分としては目の前で女性に泣かれるのは慣れていないわけで、女性を悲しませるのはいけないわけっ。

（あ～もうっ、なんだって俺が悩まなきゃいけないのさっ）

「ああそうだ、思い出した思い出した。大丈夫、忘れてないよ」

なんて、考えてみれば自分を更なる深みに陥れるだけの真っ赤な嘘を吐いていた。

「えっ、本当ですかっ」

パッと、さっきまでの哀愁顔に華麗な花が咲き誇る。

……もう、言えない。

『アハハ、ごめん、やっぱり知らない』なんてもう言えない。

「も、もちろんさっ」

頷いてから「俺のバカァ〜」と胸中で嘆いた。

女の子の笑顔に苦笑を返しつつ、すぐさま脳内のCPUをフル稼働させる。

彼女は俺の事を先輩と呼んだ。

私服姿の彼女だが、一浪目の俺を先輩と呼ぶなら高校生のはずだ。

けれど俺の高校でこんなに可愛い子がいたら話題に上ったはず。

それなら、同じ高校ではない？

そうだよな、それにここは地元のレンタルショップ。

ということは、たぶん中学時代の後輩だ。

当時の俺はスポーツに明け暮れ、部長なんてものをやっていたから知名度はあった方だ。

けれどバスケ部以外で後輩との係わり合いは無かったはず。

というわけで、

「木広中学の、バスケ部の子だよな？」

「はいっ」

とりあえず、セーフ、と胸を撫で下ろす。

一方、女の子はとても幸せそうな顔を向けてきた。

こっちが見ている眩しいほどの笑顔だ。

(うう、やっぱり可愛い)

「嬉しいです。先輩、わたしのことを覚えてくれていたんですね」

「はっははは」

ごめん、全然おぼえてない。

あの頃はスポーツ一筋だったし、恋愛対象は同級生で下級生は意識さえしていなかった。

今思えばなんて勿体無いことをしていたのだろう。

あんな暑苦しく汗臭い体育館も、こんな可愛い子がいたら桃源郷に見えただろうに。

というか、1つ訊いておかなければ。

「ごめん、顔は覚えてるんだけどさ、名前がどうしても」

「あ、はいっ。大和香澄です」

やまと、かすみ？

あれ？ その名前はどこかで聞いた覚えがあるぞ。

あれは確か……、

「ああ、そうだっ、自信満々で告白した副部長の吉井を完膚なきまでに玉砕した大和香澄だっ」

「……あの、いえ、そういうのは……忘れてもらっても構わないんですけど」

「いやいや、あれはナイスなイベントだった」

部活後に告白すると俺たちに告知した吉井。

それを聞いた俺は颯爽と体育館倉庫に行って窓のカギを開けた。

何事もなく部活が終わると、俺は部長の権力を利用して吉井と大和くんをはぶいた全部員を外に追いやる。

部の仲間であり親友でもある吉井が気兼ねなく告白できる環境を作ってあげるためだ。

が、何事においてもアフターケアというものは必要なわけで、俺は体育館を出ると部員の皆をカギの開いた窓へと手招きした。

友の勇姿を皆で見守ろうじゃないか、と。

「凄かったよな、まさか体育館のド真ん中で告白するとは思わなかった」

「そ、そうですね。男らしかったとは、思います」

「うん、でも大和くんも良かったよ。ハッキリと頭を下げたもんな」

「せ、せんぱ〜い」

わざわざ掘り返さないでください、と弱そうな顔をする中学時代の後輩。

「いやいや、褒めてるんだよ。あれだけはっきりと断られたら後腐れしないですむだろうし、それにほら、あのあと吉井も笑ってたじゃん」

「……それは、先輩たちがワッと現れて、いきなり胴上げしだしたからだと思います」

ああ、そういえば確かに胴上げもしたなあ。

空中に舞った吉井は笑顔で「殺せ～殺してくれ～」と叫んでいた気がする。

「まあほら、ああいうのはその場の勢いにまかせて笑ってやるのが1番なんだよ」

「……吉井先輩、あのあとしばらく学校休みましたよね」

「ああ、本人はオタフクだって言ってたぞ、拗ねた感じで」

「あ、って——拗ねた感じ、で……」

「そう、でも小学生の時に一回なってるから、オタフクってのは真っ赤なウソなんだ」

「——あ、ううう～っ」

勘弁してください～と再びすがり付いてくる後輩の頭をなでなでと撫でる。

「大丈夫大丈夫、キミは悪くない」

むしろ悪いのは全面的に俺なんだと思うが、吉井自身その後も俺に恋愛相談などをしていたのだから問題は無かったはずだ。

いやあ、あれも青春だったんだなあ。

ナデナデと、後輩の頭を撫で続ける。

「……………」

と、そこでかなりの違和感を覚えた。

さっきまで何も知らずに可愛いと思っていた女の子の頭を、ごく自然に撫でている今の自分。

ぱっと手を放すと、すかさず距離をとる。

「 ? 先輩？」

「……あ……いや……」

不思議そうに首を傾げる彼女には、全くといって違和感がない。

なんで？

中学時代の先輩だからって、話をした事も無いような男に、何でそんな風に接することが出来るんだ？

君にとっての俺は、中学以来あったことは無いんだろ？

性格だって変わってるかもしれないのに、何で君は、そんなに澄んだ目で俺を見られるんだ？

「……………」

「どうかしましたか？」

首を傾げると、俺がとった距離を簡単に縮めてくる彼女。

「えっと、いや……たいした事じゃないんだけど」

「ん？」

本当に判らないといった風に、再び可愛く首を傾げる。

微妙にこの場の空気が重くなった気がして、それが自分のせいだと瞬時に悟った。

「いや、そのCDさ、俺も昔よく聴いたなって思って」

「ああ、はい。そうですね」

そうですね？

「知ってますよ。先輩がこのユニット好きだって、昔友達から聞いたんです」

ああ、そうそう。

確かにそのユニットはアップテンポの曲が多くて、聴いていて自然と体がリズムをとってしまうほどにノリノリの曲が多いんだ。

って、そうじゃなくて。

「知ってたって、どういう意味だ？」

もしかすると、この子は……。

女版っ、ストーカーっ！？

驚愕の視線を投げ掛けると、彼女は照れたように頬を染めて伏し目がちになる。

「……えっと、昔は先輩が聴いてたから聴いてたんです。でも、今は普通に好きになっちゃってて、それで新曲がでたから」

別に、ストーカーではなかったらしい。

って、あれ？

「俺が、聴いてたから？」

「……」

染めた頬をさらに赤くして、本当に小さくコクンと頷く。

「……え」

ええっ！？

ええええええええっ！！！？

ちょちょっ、ちょっと待って、それが意味する事はというとだな。

つまり、アレか？ つまりそうだよな？ っていうかソレっきゃないよなっ？

えええっ、何でっ？

俺ってば現在微妙にヒキコモリなんですけどっ！ しかも受験生の落ち武者だし！

いやいや待った待った、中学当時の俺はヒキコモリでもないしスポーツ部の部長と言う、ある種オイシイ人間だったんだ。

そんな風に想ってくれる子が居ても不思議じゃないのかもしれない。

「あ、あのっ」

「オウッ！」

って、なんでここでオウなんだっ！ いまさら体育会系の本能を装っても中身はヒキコモリじゃないかっ。

「……え、えっと」

ああほらっ、大和くんが困ってるじゃないか。

「ああうんごめん。えっと、なにかな？」

なんて、今さら紳士風になるのも逆に変な気がしたが、とにかく冷静を装って問いかける。

「あの、先輩は、今日はどんな曲を借りに来たんですか？」

「えっと、そうね。借りに来たと言うか買いに来たんだよ。親には見せられないような表紙をしたコ……レ……」

てっ、やばいっ!?

なに得意気にエロチックなソレを指さしてるのさ俺っ!

「親には見せられない? どれですか?」

首を伸ばして覗き込んでくる無垢な後輩。

「ちっ、違うっ、違うぞおッ! これじゃ無いぞおッ!」

ガシッと彼女の肩を掴むとズンズンとその場から離れる。

「えっ? えっ?」

「行こうっ! 借りるんだよな? このままレジまで行こうっ」

「ちょっと、先輩でも、先輩のCD」

「先輩のCDは刺激が強いッ!」

念のため、後でこの店にあるあのCDを全て買い占めなければ、と結構マジに思った。

◇ ◇

「ちょっと先輩、聞いてますか?」

「あ……ああ、聞いてます」

店頭のベンチで缶スープを片手に疲れた耳を傾ける。

知らなかった。

この子って見てくれはこんななのに、喋りだしたら案外マシンガントークだったんだな。

「それですね♪ わたしちゃんとその子に言ったんですよ。男の子と女の子の思う好きは違うんだよって。男の子の多くは身体が目当てなの、奪いにかかってくるの」

マシンガントークに加えて身も蓋もないことを語りだす年下の少女。

ズゾゾ〜♪

と、俺はコーンポタージュの缶スープを、音を立てて口に含む。

「でもね、女の子の想いはそうじゃないの。好きな人の事を想って何かわたしに出来る事はないかとか、どうしたらもっと可愛って思ってもらえるかなとか、好きな人に自分の想いを必死になって伝えようとするの」

ズゾゾ〜♪

「って、ちょっと先輩、ちゃんと聞いてますか？」

「むお〜う、ちゃ〜んと聞いているぞお〜う」

とても判りやすい生返事で応えるが、

「それですね♪ わたし彼女にちゃんと言ったんですよ――」

どうやら、彼女の所有するマシンガンに弾切れという概念は無いらしい。

さ〜て、どうしたもんだか。

さっき一度「そろそろ帰ろうか」と言って腰を上げたのだが「ちょっと先輩、まだ話は終わってないです」と上着の裾を掴まれて元の体勢に戻されてしまった。

うん、確かに可愛い子だが、この子との関係はちゃんと考えた方がいいかも知れない。

「というわけなんですけど、先輩はこの事についてどう思いますか？」

「はいっ？」

急に話をふられたので、何の話をしてたのかさっぱり判らなかった。

なので、何とか聞いていたところまでの内容で対処する。

「えっと、つまりあれだよな。男性は狼ってわけだろ？ うん、それで自分を嫌になったことがあるし、間違ってるとは思わないけど、でもそう決めるのは草食系男子に対する脅迫でもあると俺は思うぞ。なりたくても怖くて狼になれない奴だっていると思うし」

「はい……すみません」

しおらしくも、しゅん、と縮こまる。

本質的には素直でいい子なんだけどな。

「でも先輩、聞きたいのはそこじゃないんです」

「あれ？ 違ったか？」

「はい。告白をする場合、やはり男性からですかね？ それともやっぱり、女性からでもアリですかね？」

「.....ああ、そう言えば始めはそんな御題だった気もする」

話しているうちにどんどん横道に入っていくので失念していた。

「そうだな、別にどっちからでもいいと思うよ。好きになったら男も女も関係なく告白するべきだと思うけど」

「やっぱりそうですね」

うんうん、と嬉しそうに頷く。

「それじゃ先輩、1つだけ訊きたい事があるんですけど、いいですか？」

「ああ、別に構わないよ」

「はい。えっとですね」

言い辛い事なのか、ごによごによと口ごもってなかなか言葉が出てこない。

「なんだよ？ 遠慮する事なんてないぞ」

「あ、はい。それじゃ、言わせてもらいますね」

覚悟を決めるように小さく頷いてから、真剣な眼差しを俺に向けて、

「先輩は、いま付き合ってる人って、いるんですか？」

とんでもない意味合いを込めた質問を、彼女は投げ掛けてきた。



時々、恋心が芽生える瞬間、というものを考えたりする。

ああ、なんって青い奴だ、なんて思わないで欲しい。

それは別に、恋に恋をしているから、というわけじゃないから。

むしろ真逆。

きっとそれは自分にとって、罪悪感から目を逸らすための逃避先で、その行為は二度と同じ過ちを繰り返すなど、自分に何度も念を押しているだけのこと。

だからだろう、時々思い出す。

自分の持つ醜悪な性質のせいで、傷つけてしまった遠い彼女の、泣き顔を。

昔から、なんとなく自分の想いに違和感を抱いてた。

その違和感が何なのか、知ったのは高校二年生の時だ。

人に蔑まれることを承知の上で、素直に言おう。

俺はただ、可愛い子を見て欲情していただけだ。

残念ながら、ただの下心だった。

それを友人に話すと、「別に普通だろ？」と逆に聞かれ、そして意外なことに、「そんなの、むしろ当たり前のことじゃん？」と首を傾げられた。

男が異性を好きになった時、その相手に対して多かれ少なかれ欲情するだろ、と。

言われて、まあ、確かにそうなんだけど、と頷く。

だけど、人が人を好きになる理由には、もっと、違いがあると思うんだ。

例えば男の場合には、多くの場合、ただの欲求から。

相手のことをよく知りもしないで、ただ可愛いからという理由であればほぼこれ。

他の理由としては、相手の存在によって癒されたり、その人といると好きな自分になれるからとか、つまりは素直に、相手の存在がとても嬉しいから。

理由なんて他にもいっぱいあるけど、あえてこの二つに絞り、前者の「欲求だけ」を『性欲旺盛側』と、後者を『幸福向上側』と、あえて呼ぶとする。

実際にはどっちも一緒に持っているわけだけど、とりわけ男の場合は、多く性欲旺盛側を含んでいて、女性は多く幸福向上側を含んでいるような気がする。

さて、それでは自分は、というと、これがとんでもないことに、性欲旺盛側のなかでもさらにタチの悪い、最悪な部類に入っていた。

そして自分はそれを、違和感がある、といった程度にしか認識できていなかった。

高校一年生の時、可愛い子を見て可愛いと思い、何度かすれ違っているうちに「いいなあ」と思うようになった。

二年生になってその子と同じクラスになり、会話を交わすようになると、もう本気でその子に好かれる自分になろうと努力した。

そして頑張ったかいあって、その子と付き合えることになった。

そしてまあ、がっついた、というかなんというか、好奇心というか、いや、ただの欲情なんだけど、でもそれを愛だ、とか言って、自分では本当にそうだと疑ってなかったけど、とにかく求めて、そしてその、したわけだ、欲情の赴くままの行為を。

それは本当に、とても、幸せな時間だった。

この世界の全てがとても晴れやかで彩りに満ちたものを感じられた。

でも家に帰って、自分の部屋で一人になって、そこでふと浮かんだんだ。

そう、それは自然と浮かんできた。

ただ『 もういいや 』と。

それはあまりにも自然に浮かんできて、初めはその醜悪さに気づけなかった。

でもすぐに気づいて、がく然としたが、それでも自分のことだ、嫌なほどすんなりと納得できる。

自分は勝手に満足して、それで終わらせようとしている。

その子との関係に対して、そのすべてに対して。

思えば確かに、自分は最初彼女を見て可愛いと思った。

そして何度も会う内に、小さな欲情を抱きつつ、好きになった。

そして好きになったから努力した。

好かれるような男になりたいと思った。

そして一つ、最初の願いが叶ったことで、全てを満足した。

思う。

なんだよそれ、と。

それだけが理由で付き合ったわけじゃないだろ、と。

理由なんていっぱいあるし、好きなところだって沢山出来たたる、と。

だけど、さらに思う。

そんなことを言ったって、始めから感じてたじゃないか、と。

どうやら、自分の心は始めに意図せず感じた劣等な感情を敏感にとらえて、叶うまで少し眠るらしい。

意識していたわけじゃない。

でも始めから、どこかで『それ』を終わりの行為だと認識していた。

それをすることを目的として、そしてそこをゴールと決めていた。

だから、終わった。

——まてよ、ふざけんなよ、と、自分で思う。

そんなのありえないだろ、と。

相手のことをちゃんと考えろよ、あいつはそうじゃないんだ、あいつはまだ幸せで、これからもずっと幸せが続いていくと信じてるんだ。

当たり前だ。

だって、俺たちは好き合ってるんだ。

別に嫌いになったわけじゃない。

だけど、なんで、どうしてこんなに、——冷めて、……湧いてこない？

ああ、そうだ、確かに正直に言って、もう別に、あいつに対して願ったものは叶ったから、あとは別に、どうでもいい。

今はもう、あいつが誰の女になってもかまわないし、自分との関係だって、別に切れていい。

あえてそんな風に思ってみると、そこにはまったく違和感がなくて、見つけられなくて、それが自分の本心なんだと、知ってさらに、愕然となる。

分かってる。

それはこの上なく最悪で、最低で醜悪で、どうしようもないほど人でなしな考えだと。

自分でも思う。

——死ねよ、と。

ふざけるなよと。

どうすんだよ、責任とれよ、しっかりしろよと。

だけど、どうしても、ちゃんと愛そうとしたって、どうしたって嘘になっちゃうんだっ。

知らなかったんだよっ。

自分がそんなやつだなんて、俺は自分でも思っちゃいなかった！

けどどうしても、もう心が、どうにもならないほど、冷めてて、わいて来ないんだよ。

ごまかせるなんて思っちゃいない。

ごまかしたいなんて思わない。

.....嫌だ、ああ、嫌だよ。

あいつに会うのが、本当に、嫌だ。

だって、絶対に、どこか素っ気無くなっちゃうんだ。

絶対に気付かれる。

だけど、会わないなんて出来ない。

だって、嫌いじゃないんだ。

それにまだ、俺はこんな今でも、まだ彼氏なんだ。

ああ、ありえない。こんな彼氏なんて、そんなのありえない。

.....だけど、俺って奴は、少なくともそんな、最悪な男だったんだ。

そして、結局俺は、彼女を深く傷つけることになった。

思う。

自分もう、人を好きになっただけじゃないと。

好きになったところで、抱いたら冷めるような思いなら、始めから持つなよと。

好きな人を最後は傷つけることしか出来ないんだったら、お前はずっと一人でいろよ、と。

そう自分に言って、そしてそれは正しいと思った。

だから、俺はもう人を好きにならない。

少なくとも、女の子に対して色欲を抱いたままする恋は、絶対にしない。

俺が俺にしていると思える恋は一つ。

まず第一に、こいつとずっと一緒にいたいと、ただ純粋に、そう願えた時だけだ。

そんな当たり前のことに、俺はようやく気付いたんだ。

それでも、無知な自分のせいで、一人の女性を傷つけた。

そのことは消せないし、消えない。

あのとき見た泣き顔は、どこか深いところに刻まれて、思い出すたびに苦しくなるんだ。

だから、誓うよ。

俺はもう二度と、誰にも、最悪な自分は見せないよ。

◇

◇

「先輩は、いま付き合ってる人って、居るんですか？」

店頭のベンチに腰を下ろして、生ぬるい缶スープを飲みながら聞いたそれは、たぶん告白の布石だったのだと思う。

ヒキコモリで駄目浪人生で、そして過去に最悪な自分を知った俺に、まさかそんな話が舞い降りてくるとは思いもしなかった。

驚いたと同時に浮かんでくる遠い泣き顔に、自然と顔を伏せる。

——答えなんて、始めから決まっている。

自分が今どれだけ変わりたいと思っても、ここで繰り返すほど腐っちゃいない。

だから、

「付き合ってる子とかは、いないよ。――俺は恋愛に、興味がないんだ」

彼女が次に口にするであろう言葉、

それを言えなくする台詞を、こともなげに吐いていた。

本当に、それがいいと思ったんだ。

この子のことを何も知らずに受け入れて、流されて、甘えて、一時癒されて、そしてそのなかで二度と向き合いたくない自分を知るのも、また泣き顔を見るのも、絶対に嫌だったから。

だから絶対に、拒まなきゃいけないと思った。

自分にとってもこの子にとっても、これは正しい選択だと。

そう思って顔を上げ、自分なりに笑い飛ばそうとする。

けど、そのとき彼女が口にした言葉は、俺の頭にあった予想図をあっさりと粉碎するものだった。

顔を上げて笑おうとした俺の前に、なんとも慈愛に満ちた、その子の瞳があった。

彼女はその目を閉じると、ころりと、次に開いたときはさっきまでの明るい笑みを浮かべて、快活に訊いてくる。

それはまるで、今のはなかったことにしよう、とでも言うかのように――、

なにかを、吹き飛ばそうとするかのように――、

「それって、先輩も今は望んでることに夢中ってことですよねっ？」

人からすれば、首を傾げたくくなるような言葉と、態度だった。

それでも、俺はなぜか、救われたような、奇妙な衝撃を受けていた。

うまく理解できない。色々な感情が自分のなかでないまぜになってる。

でも、求めているものはきっとこれだと、なにかがそう叫んでいる。

だって確かに、俺は望んでいるんだ。

もっと好きな自分になれるきっかけを、やりなおすチャンスを、傷つための場所を、羽ばたくための時間を――、

答えが出るよりも先に、口が勝手に動いていた。

聞かずにはいられなかった。

「――先輩も、っていうと」

「はい。わたし、ファッションデザイナーを目指してるんです」

「ファッション、デザイナー？」

「はいっ♪ なんと実はですね、今わたしが着てるこの服」

これこれっ、と、両手でチョンチョンと自分の服を指さす彼女。

……え、まさか。

「それって、もしかして、自分で作ったのっ？」

「そうなんですよ～♪」

俺の目に、その笑顔はとても眩しく映った。

夢に向かって実際に努力している彼女が本当に眩しくて、

それに魅せられて、頑張りたいと思える感情が湧いてきて、

彼女をみて、甘えとは違う向上心が湧いてくる自分が凄く嬉しくて、

「――先輩、わたし先輩に憧れてるんです。

いつも頑張ってた先輩が好きなんです。

だから、もしよかったら、わたしと……………一緒にいてくれませんか？」

彼女がしたその提案を、俺はどこかぎこちなく、でも素直に、――受け入れていた。

◇

◇

俺たちが「特別な先輩」と「特別な後輩」という関係になってから、早くも半年の歳月が流れた。

彼女が憧れている自分は決して今の自分ではなく、中学時代の自分だという事は判っていた。

だから俺はヒキコもり気味な生活を止めてまた予備校に通い出し、再び娯楽の類を封印し、（今度は無理なく多少は残し）、真面目に受験勉強に励む事になった。

眩しすぎる後輩に見劣りしない先輩であるために。

香澄みたいにしっかりとした夢はないけど、それでも俺は当初の思いのまま、頑張れるだけ頑張ると、より高みを目指し、最高の合格を目指して難解な問題集にも打ち勝っていた。

そして、そんな俺を好いてくれる香澄。

俺を見て、わたしも頑張らなきゃと瞳を輝かせてくれる。

そんな今の生活は、本当に充実していた。

時おり気分転換と香澄が部屋に遊びに来る。

香澄が帰ると、それまで狭かった部屋が急に広く感じて、俺は寂しさを覚えた。

その寂しさに自分がどれほど香澄の事を想っているのか知らされて、不意に恥ずかしくなる。と同時に、自分の内心を疑って不安にもなったが、以前感じていた違和感は、今のところ全く感じていない。

勉強で気が滅入ったら、香澄にメールを送る。

メールボックスが香澄の名前でいっぱいになる。

だけどメールも電話も、ちょっと思うところがあって制限を作ることにした。

「――それって、私との時間がわずらわしいってことですかね？」

「チガウッ！ マジホンツキでチガウッ！」

本気で焦った。

だってそうしないとずっと喋っちゃうしかなりポチポチ打っちゃうし、携帯が気になって気になって、なんて自分でも情けないことを言うと笑って頷いてくれた。

後で自分もそうだから少しどうしようか迷っていたと聞き、だったらはなからちゃん同意しろよと頭をピシッと叩いておいた。

大丈夫、別にバイオレンスな気質はない、はずだ。

そして香澄が造ってくれた服を着て、時々二人で外に出かける。

本当に心は満たされて、自分の思いに向かって、頑張っている。

こういうのが、幸せなんだなって、始めてそう思えた。

ずっと、こんな風に過ごせていけるなら、それなら俺は、特別な先輩なんて立場じゃなくて、もっとちゃんと――、と、

目を逸らしていた自分と向かい合わなきゃと、そんな風にも思えた。

そんな、満ち足りた日々が続く、ある日のこと――、

「先輩……ちょっと、話したいことがあります」

携帯の向こうから聞こえてくる、思い悩んだ声。

「ああ、今ちょうど帰ろうとしてたから、話だったらそっちに行こうか？」

「……はい、お願いします」

香澄が作ってくれたコートを羽織って、図書館を出た俺は自転車に跨る。

なにか、問題でもあったのかな？

何時もより覇気のない声がやけに耳に残った。

ペダルを踏む足に力を入れて向かった先は、とうぜん香澄の家だ。

◇ ◇

「……先輩」

大和家の前に着くと、香澄は門の前で俺を待っていた。

「どうしたんだ？ 家の中で待っててもよかったのに」

言うと香澄は気まずそうに家の方を見る。

その視線を追うと、庭を隔てた窓から香澄のお母さんが俺を見ていた。

気遣わしげなその瞳が、何かあったのかと不安にさせる。

「香澄、なにか」

「先輩。どこか、違うところに行きませんか」

「……」

聞きたい事はあったが、俺は無言で香澄を自転車に座らせると、高台の公園へと向かった。

◇ ◇

ようやく着いた公園は子供たちの声で賑やかだった。

パンダのスプリング遊具や、円形の回転ジャングルジムで楽しそうに声を上げる子供たち。

「いいなあ」

そんな子供たちを眺めて羨ましそうに目を細める香澄。

「香澄なら普通にまぜてもらえるぞ、きっと」

「ほんとに？」

嬉しそうな香澄を見て、頬が弛む。

「あぁっ、馬鹿にしていますね？」

「していないしてない」

膨れっ面のその顔に手を振って応える。

よかった。

何か良くない事でもあったのかと思ったから、香澄のその笑顔には正直ホッとした。

「先輩、あっちのベンチに座りませんか？」

「ああ」

「それで、どうかしたのか？」

「えっと……ですね……」

「 ? 」

ベンチへ近づくとつれて口数が減っていった香澄は、ベンチに座るとほぼ無言になってしまい、質問をしてもなんとも歯切れが悪い。

はて？ 何か問題になるような事がここ最近あったらどうか？

「……………駄目だ、どうしても答えが判らない、ギブアップ」

お手上げ、と両手をあげる。

「……先輩」

「あん？」

「わたし、大阪の専門学校に受かったんです」

「……」

両手をあげたまま、はい？ と首を傾げる。

大阪の、専門学校に、受かった？

「ええっ！ マジでっ!？」

「……はい」

「なんだよ、全然いい話じゃんっ！ 服飾専門学校だろっ、これでまた夢に一步近づいたじゃんかオイっ」

凄い、本当に凄いぞっ！

本当によくやった。

いやぁこれはまた、俺も負けていられんなっ。

「先輩っ!」

「え？」

喜んでると、突然香澄は大声をあげてベンチから立ちあがった。

が、すぐに肩を落として項垂れてしまう。

「……ごめんなさい」

「いや、いいけど。どうしたんだよ」

「……大阪、なんです」

「え？」

「……大阪、なんですよ」

「……」

言われて、ようやくその意味に気が付いた。

この場所から大阪なんて、飛行機を使って行くような距離だ。

つまりそれは、これから俺と香澄の距離が、とてつもなく遠くなるということを意味している。

「ば、バカだな。それなら、俺が東京の大学に行けば」

「……先輩、前に地元から通えるところって言ってました」

「……」

そう、なんだ。

こういうのもあれだが、家は決して裕福な家庭じゃない。

浪人にしても、有名な予備校に通わなかったのは金銭的な都合だし、国立大学を目指しているのも、ひとえにそれが理由だ。

町をでて、大阪で一人暮らしをするほどの余裕なんて、どう考えてもないだろう。

「……………」

途端に、全身から力が抜けていった。

なん……だよ。

なんだよ……これ。

なんで……俺、こんな気持ちになってんだよ。

香澄は、こいつは今までずっと頑張ってた、それで合格したんだ。

なのに、なんでそれを知ってる俺がっ、こんな気持ちになっちゃうんだよ。

「せん、ばい？」

くそっ！

こいつがっ、香澄がどれだけ頑張ってきたか、それをいちばん近くで見てきた俺がっ、なんでっ、なんでっ、おめでとうって、そういう気持ちになってやれないんだよ！

「せんばいっ」

「っっ」

コートの袖を掴んでくる香澄の手を、バツと振り解いて顔を背ける。

今の自分の顔は、いくら香澄でも、見られなくなかった。

失ってしまう。

頑張ってる香澄に影響されてここまで来たんだ。

本気で一緒にいたいって思えるやつにようやく出会えたんだ。

握った手のひらが、とても小さくて、暖かかったんだ。

香澄が帰った後の自室にいと、部屋がとても、広く感じるんだ。

様々な思考が頭の中を過っては主張してくる。

離れたくない。

だけどそれは、自分のわがままで、奪う事になるんだ。

そして俺に、そんな権利なんて、ない。

.....くそっ！

——くそおっ！

「先輩っ、わたし、わたし別に、まだそこに行くとは決めてないんです」

「.....っ」

「ただ、父さんが薦めただけで、わたしは.....」

「.....」

「わたしは、先輩と一緒に、いたいから」

「……………」
……………」よせて」

「え？」

「……そういうのは、さ、——なしだろ」

「……」

そう、それはきっと、半分ぐらいは、嘘なんだ。

そういう嘘は、止めてほしい。

俺だって、お前のことをちゃんと見てきたんだ。

お前がここまで、どれだけ頑張ってきたのかくらい、ちゃんとこの目で見てきたんだ。

そんなお前が、こんな田舎の専門学校で満足できるわけないだろ。

ちゃんとした所で、ちゃんと自分を試してみたいんだろ。

ただの先輩だって見くびるなよ、そのくらい、ちゃんと判ってるんだ。

判ってるのに、なのにそんな事を言わせてる、こんな自分が、嫌なんだ。

例えばさ、恋愛って奪うか与えるかだって言う人がいるけどさ、でもそんなのって悲しすぎるだろ。

それでもお前は、いま俺に与えようとしてるんだよ。

そうしたら俺は、お前から、大切なものを一つ奪う事になるんだよ。

あんなに頑張ってたのに、なのにつ、お前の可能性を、俺が奪うことになるんだよっ！

そんなのは嫌だろっ！

俺はっ、香澄がすげえ可能性を持ってるから、それを追ってるお前がすげえ眩しかったからっ、だから惹かれたんだよ、一緒にいたいって、そう思えたんだっ。

「———そう……だよ」

「……」

俺は、香澄にずっと傍にいて欲しいと思いながら、その一方で香澄に夢を追ってほしいと願ってるんだ。

香澄のことは何よりも大切だ。

でもそれは、お前が持ってる可能性も含めて全部が、すべてが大切だって意味なんだよ。

こんなところで、足を止めてほしくないんだ。

それも、こんな、弱くて情けない、俺なんかのために。

そうだよ。

俺は弱い自分のせいで、香澄の可能性を奪いたくなんてない。

そんな自分になりたくない。

俺は俺に出来る事を香澄にしてあげたい。

ちゃんと支えてやれるような男になりたい。

それは、引き止めたいからじゃないんだ。

近くても、遠くてもいいよ。

俺は行けるところまでずっと、お前と一緒に進んで行きたいんだよ。

「――香澄、お前さ、ほんと、頑張ってこいよな」

「.....」

なにも言葉を返さない香澄に向かって、ゆっくりと振り返る。

「.....っ」

香澄は、ぎゅっと口を引き結んで、瞳は涙に揺れていて、それでも、しっかりと俺の目を見据えていた。

行ってこいよ、と言う俺の意思に、なにも示さない。

それだけでも、十分に想いが伝わってくる。

行きたいに決まってるんだ。

自分の好きなことを存分に出来る環境で、自分自身を試してみたい気持ちは凄く分かるんだ。

それでも顔かないのは、香澄が俺との時間を、本当に大切にしてくれてるから。

大丈夫だよ、香澄はちゃんと進んでいける。

だから、俺は先輩として、ちゃんとその背中を押してやる。

「香澄。合格、おめでとう」

「……っ」

「夢だったもんな、今までずっと、すっげえ、頑張ってきたもんな」

「——ッ」

「合格、おめでとう」

言うと、不意に顔を崩して、香澄は泣き出した。

その頭に手をおいて、俺は優しく引き寄せる。

俯いたまま肩を揺らす香澄の、頭をそっと撫でる。

「……くっ……うう」

「……まったく、ホントに、いい後輩だよ、お前って」

結局、ひと言も「ごめんなさい」とは言わなかった香澄。

自分の夢と俺と、どっちも選べない。

それだけで、充分だよと、素直に思える。

ありがとう。

それに、さ。

勝手だけど、俺には必要なんだよ。

俺は俺で、自分のことをもう一度ちゃんと試してみないと、どうしても、前に進めないみたいなんだ。

だから——、



「——えっ、そのアパレルって、そんなに大変なのか？」

少し歩いてから再びベンチに腰を掛けると、香澄の進む業界の話聞く。

「……はい。だから、卒業するまではあまり帰って来れないと思うんです。合間を縫ってバイトもしないといけないし、だから……」

「だから、今までみたいに連絡するのは難しい、か」

「……はい、すみません」

それを聞いて、俺は素直に凄いなと思えた。

正直なところ、話を聞けば聞くほど香澄の入ろうとしている世界に対して、凄い、どころか、正直怖いなとさえ思えてくる。

それほどまでに容赦のない世界みたいだ。

だけどなんだか、嬉しいというか、誇らしくもある。

香澄が、そこで頑張りたいと思っている事が、まるで自分のことのように。

今までみたいに連絡が取れなくなると言われると、決めていた覚悟が少しぐらついてしまうが、それでも連絡は取りすぎるくらいに取っていたのだ、だから仕方ない気がする。

アパレルという世界がどんなものなのかは実際のところ話を聞いてもよく判らなかったが、それでもその世界の競争率と必要な意思の強さはヒシヒシと伝わってきた。

俺はそこに飛び込もうとする香澄の意思を、奪いたくない。

「いいと思う」

「え？」

「正直、寂しいけどさ、でもやっぱり、それで良いと思う」

「……………でも先輩、わたし……変わっちゃうかもしれません」

「……………」

それは、香澄なりの牽制なのだろう。

なんとなくだが、言いたい事は伝わってきた。

これから進む道の上で、今の自分のままではいられないと、直感的に感じているのかもしれない。

同じ夢を追ってる奴らとの出会いだってある。

辛い時に、俺が傍にいてあげられないことだってある。

進んでいけば、変わっていく想いなんて幾らでもあることは、俺だって少なからず知っている。

それは当然、香澄が抱いている、俺に対する想いだって――、

それは正直、絶対に嫌なんだけど、でもだからといって、俺は香澄の可能性を捻じ曲げたいとは思わない。

間違っているのかもしれない。

矛盾しているとも思う。

それでも、俺にはまだ、言えないんだよ。

行くななんて、思っけていても、言えない。

だから、

「香澄、約束してくれないか」

「――約束、ですか？」

「ああ。連絡が取りづらくなるのは仕方ないし、もしもの話、そうならないように俺も頑張るけど、それでも香澄の想いが変わっちゃったりするかもしれない」

「……」

「だけど、それでももし、まだ俺のことを想ってくれるなら、香澄が専門学校を卒業した後に、この場所で、香澄に伝えたいことがあるんだ」

「……………」

呆気にとられたのか、香澄は暫しぽかんと呆けた顔をして、

「……それは、今じゃだめなんですか？」

聞かれて、俺は、ええっと、とかなり困って、それでもうんと、頷く。

気持ちは分からなくもないし、言えない自分が情けないんだけど、でもすまん、俺はまだ、自分自身に対してそこまで信用できないところがあって、煮え切らなくて本当に申し訳ないけど、それがあろうちはどうしても認められなくて、

「……わるい。今までさ、香澄には何度もわがまま言ってきたけど、でも、たのむ、どうしても、俺は自分のことで、もう一度ちゃんと知らなきゃ、自信が持てないことがあって」

「……………」

「俺にとっては重大なことなんだよ。——とは、言え、まあ、なんて言うか、バカみないな話だってことは分かってるんだけどさ」

「————はい。まったくもって、そうだと思います。
と言うのは、まあ、ウソですけど……」

ぽつりと、呟くように言って、その口に小さな笑みを浮かべる。

そして腰を上げ、くるりと小さく身を躍らせる。

手を背中後ろに組んで、少し腰を屈めて、

「私の身勝手なお願い聞いてもらうんですから、私だって、先輩の身勝手なお願いをちゃんと聞いてあげますよ。
——でも先輩、私は、先輩のそれって足りてないと思うんです」

言われて、首を傾げた。

なんの話をしているのか、意味が、まったく分からない。

「なんだよ？ その足りてないって、てか——」

「分かりませんか？ 私ちゃんと知ってるんです。先輩が自分のことで悩んでるの。その内容だって、ある程度は知ってると思います。
男の劣情についてのうんぬん、ですよ？」

——ッ！？

「——なっ、なっ、なんでっ！？」

「……なんでって、先輩ってあるところでは結構人気あるんですよ？ 当然なにかあったら話題にもなって、だから、噂、ですよ。先輩がそのことを相談した人っているでしょ。その人の妹が私の友達で、その子が——」

づあああああっあ！！！！

「オーケーっ、オーケーだ分かったよっ！ 誰だかも分かったしなんか流れも分かったからそれ以上言わないでいい！
っていうか言わないで頼むっ、てかなんで今まで、って、待った、俺なんかちょっと混乱っていうか駆け出したい気分だからっ、お願いっ」

パンッ、と神を拝むかのごとく手を叩く。

が、香澄は楽しそうに首を振って、

「ううん、イヤです。

私、言いましたよね。足りてないって思うって。

先輩、まだ怖がってるんですよきっと、——触れ合うのを。

でもそれって、ただ会わない時間を作ればいいってだけじゃないですよ。

根本的なところで間違ってますよ」

「ああ～えっと、いや、あのさ、そ～ゆ～話は、つ～か、だって」

だって、その位しか方法が浮かばないっていうか、

いや、実際にはあるんだろうけど、でもそんなのはその、

「というわけで、だから、あとで先輩からその、——誘ってください、じゃないとっ！ きっと時間を持っても意味がないと思うんです。二度は言わないからちゃんと今で覚えてくださいっ、でも今日はやですけど」

ベケ、と両手でバツテンを作る後輩に、……えっと？ 今のはどういうことだ？ と、考えなくても分かっているくせに少し誤魔化して、でもそんなこと言われてもいきなり今日とか明日とか心の準備がっていうか、でもそれってつまり——、とかなんとか思っている内に、なんとなく、なんだか興奮してきている自分に気づいて、イヤと言われると逆にしたくなるような、なんて思ってそこでようやくハッとなった。

ヨクナイ。

そんな感情をちょっとでも持つのはまた——、

「……いま、たぶん先輩、ふたをしようとしていませんか？」

「……………」

ちょこんと首を傾げながら、それでも不満げに眉を顰めた香澄の、その目が別の色を帯びていく。

「——私、もうすぐ遠くに行っちゃうんです。そうしたらもう、暫くは先輩に、なにもしてあげられないんです。…
…と、言っても、『なにも』って別に変な意味じゃないですからね、誤解されたら、……と言って、されないのもいえ、……なんでもないですけど、」

「……いや、分かるから。別に言い直さなくても」

「だったらっ、ちゃんと考えてください。前にも言いましたけど、私は先輩のことが好きです。でも、あの時はなんと

なく、それを言っても無理だって思ったから、だからああ言って、でもこれでまた二年、おあずけですよ？ 私だって自信ないです。悩んだりするんです。身をもてあましたりもするんです。先輩と一緒にいたいけど、でももし捨てられたらって考えたら、しり込みだってするんです。でも、私は先輩を信じてるし、自分にだって自信があります。大丈夫だよ、だって私、容姿だけじゃなくて性格だっていいもんっ！」

「――な、なんとっ!？」

言い切った!? こいつ自分で言い切ったぞ!?

性格だっていいもんときた!

思わず吹き出してしまう。

なんで笑いますかっ、と目くじらを立てる香澄の肩を叩きながら笑い、悪い悪い、だって、と謝る。

「分かったよ、ごめん、ちゃんと考えるよ。ちゃんと真剣に向き合うから。

うん、ええっと、うん。言ってくれたことも忘れないし、ちゃんと誘うし、で、それで、でもえっと、やっぱり伝えるのはその上で、その」

「卒業した二年後、ここで、ですね」

「うん、そうしたい。――だめか？」

「よくはないです。……でも、まあ、いいですよ。でも先輩、そのかん絶対に、浮気はダメですからね」

いやだから、まだ俺たち付き合っていないんだって、という言葉は飲み込んで、俺はもちろんと、むしろお前が心配だ、と言って、目を細めた。

「じゃあさ、なんか、記念でも残すか」

「記念、ですか。それなら――」

そういつて、香澄はポーチに手を入れた。



それから暫くして香澄は上京し、香澄が言っていたように、連絡が取り辛くなった。

「2年後に、あの場所で逢おう」

自分を試すような提案をした、あの頃の自分。

大学生になった俺は、その提案がやはり間違いだったかも、と悩んでいた。

変わっていく環境が強すぎて、今に過去がかすんでいく。

幸せだったあの頃の時間を、どこかおまごとのように感じて、忙しい今に覆われて見えなくなっていく。

それでも、俺は――、

「.....」

この場所に、立てていた。

あのとき二人で座ったベンチを見下ろして、

そこに書いた二つの名前に目を細めて、

誰も居ない公園で、俺は香澄のことを待っていた。

時刻は、11時58分。

来るのなら、もうここに居てもいい時間だ。

さっきまで胸の半分を占めていた満足感が、夜の冷たい風にふかれて消えていく。

「.....」

香澄。

俺は、ここに立てたよ。

ちゃんと、お前のことを想い続けられたんだ。

そこに居ない香澄が、あの頃と変わらない笑顔を向けてくれる気がした。

胸に込み上げてくる想いを、必死になって押さえ込む。

それなのに、空しさがじわりじわりと込み上げてくる。

もしかすると、これは昔付き合った人を傷つけた自分への、罰なのかもしれない。

そんな、なんだか悲劇の主人公みたいなことを浮かべて、そんなことを思ってる自分に嫌気がさしながら、それでも、やっぱり、——苦しい。

むなしさなんて、当たり前だ。

自分のことをかえりみれば、それだけのことはした。

救われないなんて、思うほうがいけない気もする。

だけど、それでもやはり、

俺は香澄を、失いたくなかった。

「……………」

腕時計の秒針は、すでに12時を回っていた。

思う。

変わらない思いなんて、きっとないんだと。

それは悲しい意味での言葉じゃなくて、むしろ、可能性という意味で。

だって、俺は変わることができた。

最悪だった自分を見つけて、それを嫌がって蓋をして、それでも、こうして変わることができた。

多分に、大和香澄という最高の後輩がいてくれたからだけだ。

「……ほんとうに、あいつがいなかったら、俺は今でも抜け出せなかったんだろうな」

なあ、香澄。

俺はさ、本当に、感謝してるんだよ。

それに、分かったんだ。

ようやく、自分でも認められるようになったんだ。

だからさ、だからちゃんと、この想いを伝えたいって思う。

だけど、

「あいつ、今頃どこでなにしてるかな」

呟く。

とそこで、

——ピピピ、

————ピピピ、

——？

不意に、公園の入り口付近から聞こえてきたデジタル音に顔を向ける。

見ると、公園の垣根の向こうで、何かがゴソゴソと動いていた。

「……え？」

……な、なんだ、あれ。

なんだ？ あれは。

あの怪しいのは一体なんだ？

確認しようと近づいて、おそるおそる上から覗き込んでみる。

と、そこに——、

「……………」

うずくまって、なんとも気まずそうに見上げてくる、香澄がいた。

「……なっ、なにやってんだ、お前？」

訊くと香澄はあたふたと逃げようとするが、諦めたのか、情けない顔を向けてきて、

「えっと、だって、——先輩が、先輩が30分も前に来てるからっ、だから悪いんですよ」

「はっ？」

「いえ、だって……、約束は、12時じゃないですか。……出て行ったら11時半だし、でも12時になったからって、なんか、知らん顔して出ていくのもなんかもう、なんか変だしっ」

ギンッ！ と睨まれてしまう。

「……………」

ああ、なるほど。

「つまりは、ずっとそこで隠れていたと？」

「……………」

睨んだまま、――こくり、と頷く。

「酷いですよ…声かけたくても、一度タイミングを逃すともう、掛けられなくなるし」

さらに拗ねだすその顔は、最後に合ったときのそれと全く変わっていない。

というか、俺のせいなのか？

「先に来て隠れていようと思ったのに、いざ来てみたら先輩が先に来ちゃってるし……、時間になったら出て行こうとも思ったけど、後から来て隠れちゃうと何だかそれも変だし……」

「……あー、まあまあ、そんなことは気にしなくても」

「ほらあっ、先輩呆れてますっ。感動もなにも無いじゃないですかっ！ そ～ゆ～人なんですよ先輩はっ」

「……いやまあ、確かに感動具合はもう、かなり吹っ飛んじゃってるけど、まあそれはいいとして」

「いいわけないでしょ、先輩に会いたかったんですよっ。2年ですよっ、2年っ！」

「いや、うん、判るよ。俺も同じだし」

と言うかいちおう、正月に一回会ってるから約1年振りなんだけど、

「本当にっ、本当に不安だったんですからっ」

うう、と顔を歪めると、俺のコートに力無く額をあててくる香澄。

なにを怒ってるんだ？ と始めは思っていたが、そう思うのもひどいのだろう。

久しぶりに会えたのに、30分もオアズケをされたら、きっと怒りたくもなるんだ。

いやもしかすると、こんな状況でもめげずになんとか感動の再開シーンを作ろうとしてるのかもしれないけど、それならそれで、ちゃんとその想いに乗ってあげなきゃいけない気もする。

そう思ったので、俺はそんな香澄の頭を優しく撫でて、抱き寄せた。

久しく忘れていた香澄の抱き心地と、香り。

手の平を通して感じる温もりに、溜まっていた想いが溢れ出して、そのまま強く抱きしめた。

「……………香澄、おかえり」

「……うっ……くうっ」

「 おかえり 」

「……うっ……ううっ」

うめいてる香澄は、きっと俺がきつく抱きしめすぎて苦しいからじゃなくて、感動して声も出せずに泣いているからだろう。

なんだかもがいているようにも見えるが、でもごめん、触れたらやっぱり、想いがあふれ出してきて、

嬉しくて、

「——香澄、俺、お前のことが本気で好きだ。だから、俺と付き合ってくれ。じゃないとこのまま、もっと思いっきり抱きしめてそのまま窒息させちゃうかもしれない。オーケーだったら頷いてほしい」

そっこうで、こくこくこくと頷いてくれる香澄。

俺は喜んで抱きしめている力を強めた。

「ン〜〜ッ！！！」

そして弱める。

ぶはあっ！ と大きさに呼吸しだす香澄に笑いつつ、

「なあ香澄、ほんとにオーケーか？ ただ早く息を吸いたかっただけとか言わない？」

「言いますよっ！ 当たり前でしょっ！

でも、だいじょぶですよ、——もう」

膨れっ面を見て、笑う。

——思えた。

俺たちは本当に、この先ずっと、きっとどんなことがあっても、一緒に進んで行けると。

香澄を好きな自分のことを、そしてなにより、香澄のことを、ずっと信じていけると。

ああ、

俺は一生涯を掛けて、香澄と共に歩いていくって、そう決めた。

香澄が望む限り、絶対に、だ。

おわり

『 あとがき 』

初めましての方、「はじめましてっ！」

お久しぶりですの方、「どうもっ、またやってきました！！」

風都葉月、再びあとがきのみ追加に登場お～！！

いや～なんと言いますか、一つの時代が終わり、そして新たな時代が始まるのだな～と思う今日この頃な風都です。

ただし私としますと別にそれも不思議じゃないな～と。

なぜってだって、今までの世界だと大多数の人が理不尽にただ否定されてただけですもの。

それはとても哀しい世界で、少なくとも外にいる大勢の人を救えない世界で、

——うん、それゆえに崩れるのだろう、と。

ただ今、同じ哀しい世界を別の形で造ろうとする人たちもいます。

私はただ、否定も肯定もせずに願う。

人が集まればそこに綺麗な想いもキタナイ想いもあって当然、仮に汚い想いがなければそれは、異常なまでの美しさです。

その美しさが当たり前と思えるほど自分は綺麗な人間ではないので、だからこそ、こう願います。

『 自分たちを守りながらも、無垢な子供たちに誇れるような世界を築いてください 』

私のような自己満足のクリエイターが作るちゃちなしろものではなく、後の世に多大な影響を与える世界の構築、それが、そこに関わる人が知らず背負わされている、誰も罰することのできない、精神です。

その精神に、どうか、私の願いのひと欠けら、いえ、チりに等しくとも、抱いていただければと、そう願っております。

☆ ☆

とお～、さてっ！！

らしくなく語ったのにはワケがありまする。

風都ただ今、酔っ払ってまするう～、ウイックウ♪

いやぁ～今日はなんとも風と雨が凄くて、傘をさした瞬間にズパッと骨組みが全部反りましたっ！

濡れた濡れたっ！！

え〜っと、伝えたいことはと言いますと、うん、特に無かったりしちゃいます。

なにせ酔ってますので。

でも不思議なんです。

ここ最近、ダウンロード数と閲覧数が合っていないというか、不思議な振る舞いを見せておりました。

あっ、そういえば、不思議といえば今日、脱走したのか気力で飼い主を振り切ったのか、元気に一匹で散歩している犬が何故か後ろ向きで歩いていました。

車を運転しながら見たのですが、あれも不思議だったなあ。

あの子はなにを食べてしまったのだろう？

もしかすると、ご主人が早送りで再生一ならぬ、『巻き戻しの状態で再生(?)』とかの映像を延々と見せ続けた結果、「――ああ、オレも歩くときはああじゃないといけないんだ」とでも思わせたのですかね？

それって凄くネッ？ ある意味成功じゃんっ！ いやいや教育失敗っていうかその方針がナイわ！！

っていうかこんな発想をする私がナイわっ！！？

うん、どうやら私、今日も絶好調のようです♪

いや、ダメだ。

どうにも語れば語るほど変人になっていくような気がする。

まあそれも性分なんでしかたないとして、そろそろ締めにかからせていただこうと思います。

う〜、二時には寝て八時には起きようと思ったのにい。

睡眠時間がまた削れたあ。完全なる自爆だあ〜……。

と、いうわけで、ここで締めとさせていただきます。

それではみなさまっ。

またいつの日か、こうして一方的にはありますが、何かを伝えられる日がくることを、強く、強く願っております。

それではまた後ほどっ！ さようならあっ！！

『 先輩と後輩 』

<http://p.booklog.jp/book/46894>

著者：風都 葉月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ghjvbn990/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46894>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46894>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.